| 都道府県番号 | ３２ |
|---|---|
| 都道部県名 | 島根県 |

（①□　②□　③■）
※該当する観点にﾁｪｯｸすること

## Ⅰ　学校名及び規模

| 益田市立吉田小学校 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | ３ | ３ | ３ | ３ | ３ | ３ | ２ | ２０ | ３２ |
| 児童数 | ９７ | １０５ | ９２ | ８７ | １１２ | １１５ | ３ | ６１１ | |

## Ⅱ　実践研究概要

・主題（テーマ）　***わかる・楽しいで学力アップ！***
確かな学力を身につける指導のあり方

・テーマ設定の趣旨
学力の向上には、児童が＜わかる→楽しい＞学習のサイクルを繰り返すことにより、学ぶことの喜びを感じ、自分の力に自信をもち進んで学ぼうとする意欲を高めることがまず必要であると考えた。そこで、児童の力を伸ばし学校全体の研究として着実に推進していくために、算数科の少人数指導を重点教科に絞る。また、学力向上には教師の授業改善、教員の資質の向上が不可欠である。組織づくりと研修の意欲を高めるための研修のあり方も工夫していく。

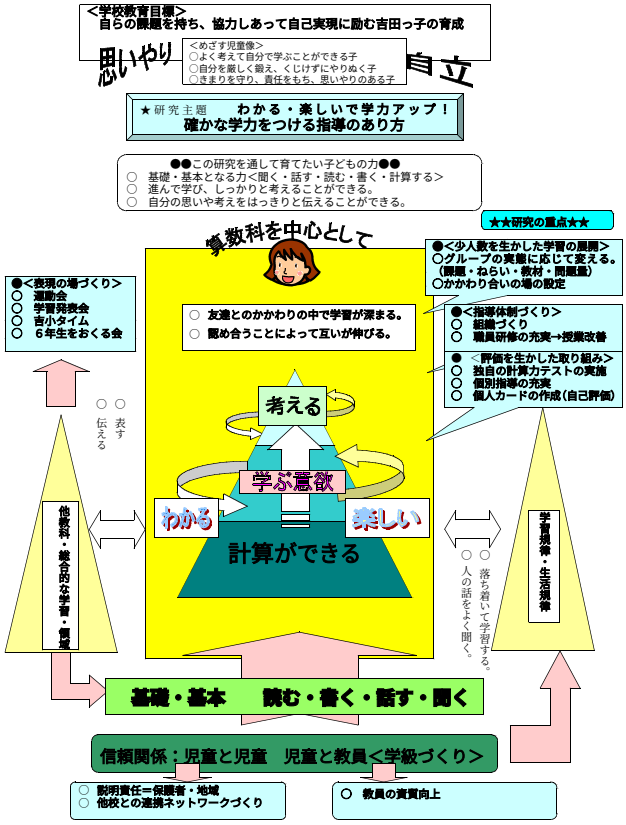
## Ⅲ　実践研究の内容について

### （ｉ）研究体制の工夫

#### (1)研究構想図づくり

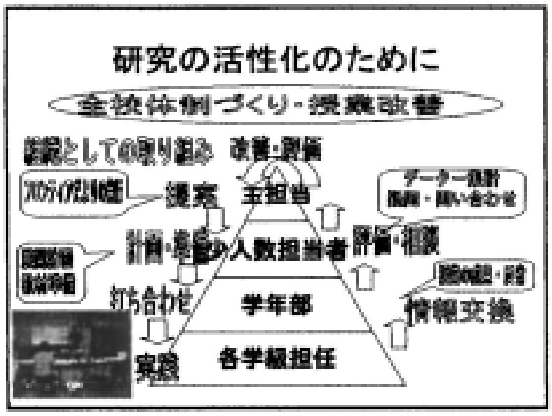
・本年度の実践を踏まえ作成。来年度の推進計画を立てる。

フロンティアスクール研究構想図



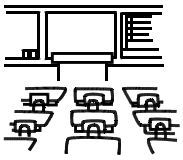

#### (2)組織づくり

・縦割り＝ﾌﾛﾝﾃｨｱﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ会
＜少人数担当者会＞
・横割り＝学年会
効果的に機能させていくための体制




#### (3)ﾌﾛﾝﾃｨｱだよりの発行

・月ごとに推進方法を提案し学習のあり方・学び方の目標設定により教員の共通理解を図った。



（ⅱ）実践研究の内容＝児童生徒の学力を評価した指導の改善

(1)計算力の向上をめざした→計算力の評価

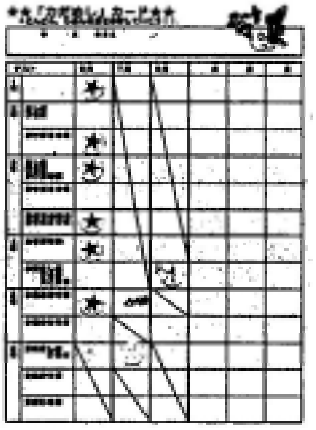
「わかること」の基になる計算力を身につけることがまず必要であると考えた。
学校独自に計算ﾃｽﾄを作成した。＝各学年の基礎となる計算＜四則計算を中心＞抽出

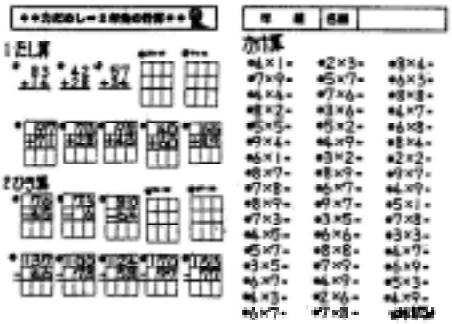
○一人ひとりの計算力をさかのぼって把握する
○学年・学校全体の傾向を把握する。
○実態把握により今後の指導を工夫する。

＜５月＞
＊作成・実施

＜６月＞
＊集計・分析
＊対応策検討
＜各学年部＞

＜７月～計算力アップ対応＝学年部＞
★繰り返し学習をする。
・授業の最初に100ﾏｽ計算を取り入れる。
・朝の活動の時間にﾐﾆﾌﾟﾘﾝﾄをする。
★放課後の個別指導<マントル教室>
★定期的に計算大会を実施する。
・学年部一斉に実施する。
・同じテストを繰り返し補充をしていく。
★配慮を必要とする児童について
・特別支援部と連携し実態把握・指導





(2)習熟の状況を把握する→学習での評価

本校では本年度の実践により以下の指導体制が効果的であることがわかった。

１年　　＝ｽｸｰﾙｻﾎﾟｰﾀｰ制によるT.T.　２年＝T.T.中心、学期に一単元少人数指導
３年　　＝少人数指導中心＜均等グループ＞
４・５年＝少人数指導＜均等・ペース別グループ＞
６年　　＝少人数指導＜ペース別・習熟度別グループ＞
＊ペース別は自己選択　＊学級単位の少人数指導を基本とする。

より理解を深めるためには、児童の習熟の状況に応じて少人数指導の体制を柔軟に工夫していくことが必要である。

例①　単元途中での工夫＝コース変更＜小単元を区切りとして＞

★選択し変える場合
A　B
・自己選択
A　B
ペース別　A＝どんどん

★グループ編制し直す場合
A　B
・プリントの進度等でコース分け
・個人課題等でコース分け
C　D
ゆっくり

例②　コース内での工夫

★プリント学習
a　○自分のペースでプリントを進めるシステムにしておく。
↓
b　○採点しながら個別指導をする。
↓　○最後に発展問題を用意しておく
c
↓
d　＊人数が少ないので対応しやすい。
↓　＊個々のつまづきが評価できる。その場で対応できる。
e
↓
f

★グループ編制
自力解決ｺｰｽ
支援ｺｰｽ
＊コース内の個人差に対応する。
＊スペースがあるので席の移動・場所分けが可能で容易である。

**例③　単元終末段階での工夫＝ウォークラリー形式**

＊児童の課題に応じてコース設定をする。→学年解体とする。複数教員で対応できる。
＊ゲームのように楽しく習熟ができる。　→意欲・理解度がアップする。

**★＜６年「整数」の学習の場合：１１５名＞**

・学級　A　B　○少人数指導

ﾌﾟﾚﾃｽﾄ

・学年　結果でｺｰｽ決定

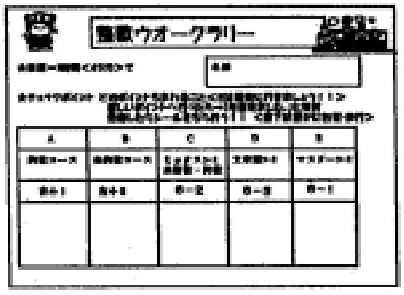
まとめﾃｽﾄ

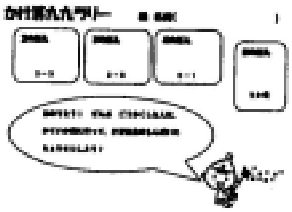
**★＜２年「かけ算」の学習の場合：１０５名＞**

・学級　T.T

・学年　2　3　4　5

・学年　6　7　8　9

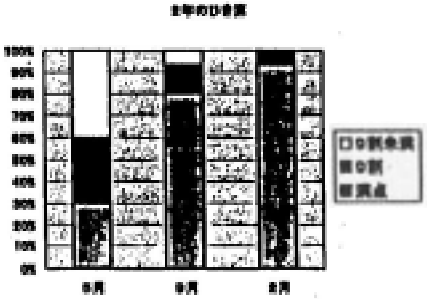


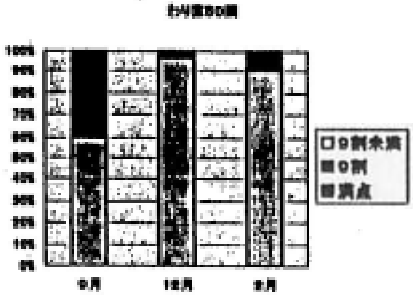



**（iii）成果と課題**

**(1)成果**

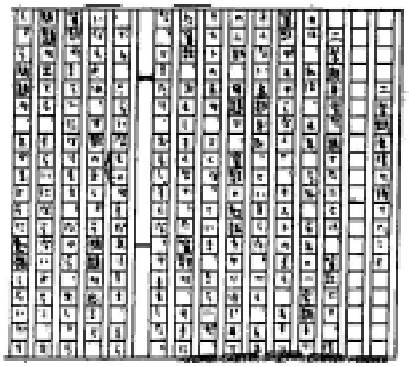
○繰り返しの学習で基礎的な計算力が向上してきた。＜３年＊組＝３１名＞

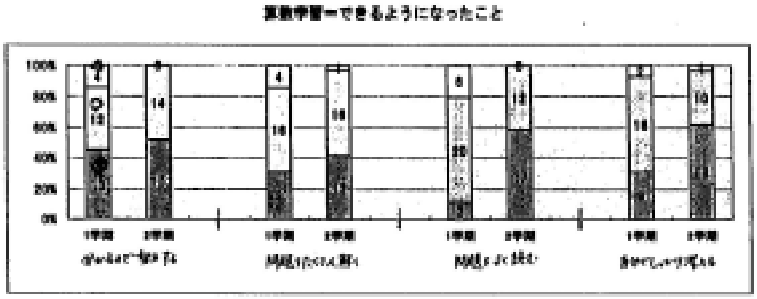




○算数科に対する意欲が高まり、学習に対する自信がついてきた。

＜６年児童作文＞　　＜４年@組＝３０名・・ふりかえりカードより＞





○複数教員の対応で児童理解が深まり、開かれた学級づくりへとつながった。
○組織作りにより、少人数担当者が積極的に推進にあたり、全校の取組となった。積極的な授業公開、職員室でも打ち合わせの声が聞かれるようになった。

**(２)課題**

○研究構想図をもとに総合的に学力の向上を図っていく。
○情報部・評価部を加えた学年縦割りの研究組織づくりを充実する。
○グループに応じた学習の展開作りを通して、授業技術の向上を図る。

**（iv）成果の普及方策**

(1)保護者へのたよりを発行・参観日での授業公開
(2)地区フロンティア協議会での授業公開
(3)市内中部ブロック教務主任者会「評価ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」を発足＝評価規準作成・研修